Bibliophiles

ビブリオファイルズ　No.2(2020 年度)

新着図書案内・お知らせ　西宮東高校図書館

（ここで紹介するのは新しい本の一部です。）

『サル化する世界』　　内田樹

人気の評論家・内田氏の最新作で、よく売れているみたいです。紙の本は、今は入手しにくいようですね。

売れている理由は、読めば分かります。「歯に衣着せぬ」内田節があちこちで炸裂していて、論点の読みも深いのです。

例えば、今年から導入された高校の「論理国語」。内田氏はこれを「くだらない教科」と一刀両断し、こうした教科ができた背景を「文学など勉強しなくても俺は成功した」と考えるビジネスマンや政治家が、こうした「文学を排除した国語」を思いついたのではないか、と分析しています。

『カケラ』　　湊かなえ

モヤモヤしたイヤな読後感が特長のミステリー作家、通称「イヤミスの女王」の湊かなえの最新作です。今回は「美容整形」という、彼女にとって初めてのテーマに挑んだ意欲作です。

美容クリニックに務める女医の久乃は、ある日、故郷の同級生の娘が亡くなったことを知ります。彼女は高校２年から徐々に学校に行かなくなり、卒業後、ドーナツがばらまかれた部屋で亡くなっているのが見つかったというのですが・・

『勉強が死ぬほど面白くなる　独学の教科書』　　中田敦彦

オリエンタルラジオの芸人として、また紅白歌合戦にも出たミュージシャンとしても知られている筆者。彼は慶応大学を出た高学歴芸人でもありますが、テレビの視聴率がどんどん下がっていく状況を見て、教育関連の動画に注力しようと「YouTube 大学」を開設。歴史や数学など多様なジャンルの教育動画を配信し、今や 240 万人以上のチャンネル登録者数を獲得するほどの人気を博しています。

そんな筆者による、本書は「独学」の指南書です。ぜひご一読を。

「一億三千万人のための　『論語』教室」　　高橋源一郎

日本人が千年以上も読んできた、古典の中の古典、『論語』です。しかし、この本は中国文学の専門家が翻訳することがほとんどでしたが、今回、小説家の高橋源一郎が大胆に話し言葉を使って新しい訳を世に問いました。でも**「たいていバカですよ。というか、バカ以下です、ふつう」**という具合に、あまりにも現代風な訳しかたなので（笑）、やはり世間の評価は賛否両論。さあ、あなたの評価は？

『新型コロナウイルスの真実』岩田健太郎

感染が広まってしまったクルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス号」の危険性にいち早く気付いて船に乗り込み、情報を世界に発信した岩田教授。この本は、そのいきさつを当事者の立場で詳しく解説していて、面白いです。

また、新型コロナや感染症全般についても、目からウロコが落ちる情報が満載。例えば、「政府が中国からの渡航者を早くから制限すれば、こんなことにはならなかった。」という意見をよく聞きますが、あれは岩田先生によると間違っているそうです。そのワケは？

『最後の講義 完全版　どうして生命にそんなに価値があるのか』　　福岡伸一

生物学者の福岡氏が「もし明日、自分が消えてしまうとしたら、今日のうちにこれだけは皆さんに聞いておいてもらいたい」という設定で NHK が放送した「最後の授業」が本になりました。

福岡氏は「人工知能（AI）が人間の知性を超える日は来ない」と言いますが、その根拠とは？

6/15（月）から、平常通りに図書館を開館します！

長らくお待たせしましたが、図書館も元の利用方法に戻します。

利用時間は 8:30 ごろ（教師の打ち合わせが終わり次第）～17:00 ごろまでで、昼休みや休憩時間も開いています。曜日による学年の割り振りや机の使用禁止も解除します。ぜひ、ご利用下さい。

『猫を棄てる　父親について語るとき』　　村上春樹

人気作家・村上春樹の最新作ですが、短めのエッセイなので、あの独特の「仕掛け」をほどこした複雑な長編小説を期待すると、はぐらかされます。しかし、全体に詩的な味わいのある文章で、人生について考えさせる、名品だと思います。ハルキストもそうでない方も、是非どうぞ。

村上氏が西宮の夙川に住んでいたころ、ふとしたことから飼っていた猫を父と二人で海辺まで棄てにいく描写から、物語は始まります。しかし、家に帰った二人が見た驚くべきものとは・・。

『パラスポーツルールブック　パラリンピックを楽しもう』　陶山哲夫

残念ながら延期になったパラリンピックですが、時間に余裕ができましたので、パラリンピック独自のルールや実施方法を今からチェックしておきませんか？特に競泳は、日本人にメダルの期待が多く寄せられていますが、聴覚や視覚の障害者のために色んな「工夫」がなされてますよ。

今号のひとこと

No hay caminos, hay que caminar.

進むべき道はない、だが進まねばならない。

ルイジ・ノーノ（1924-1990）

ノーノはイタリアの作曲家ですが、この言葉はスペインの修道院の壁に刻まれていたのを彼が見て感動し、自分の曲のタイトルにもしたものです。彼は金儲けのための商業音楽を嫌い、前衛的な曲しか書きませんでしたが、その結果、周囲の無理解に苦しみました。まさに「道なき道を切り開く」人生だったと思います。そんな彼のこのモットーは、新型コロナで多くのものを失った、たとえて言えば荒野のような日本に住む僕たちの心にも響いてきませんか？

進むべき道・・この荒野の中を、ぜひ皆さんが道を切り開いて前進して下さい。応援しています。